

気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館が果たす意義

宮城県気仙沼市総務部危機管理課

はじめに

気仙沼市（以下「市」という。）は、宮城県の北東端に位置し、沿岸部にはリアス海岸の景観が広がる風光明媚なエリアが多く、また、世界4大漁場である三陸沖が眼前に広がり、基幹産業として水産業が発展するとともに、海の幸など観光で訪れる人も多く、賑やかな交流がまちの彩りでした。

2011年3月11日、午後2時46分頃、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の地震（東北地方太平洋沖地震）が発生し、この地震に伴う大津波と津波で破壊された重油タンクなどから流出した油による大規模火災も発生するなど甚大な被害を生じており、2021年12月現在で死者1,142人（震災関連死を含む。）、行方不明者212人に上る最大級の悲劇を市にもたらしました。

市は、東日本大震災から9年を迎える2019年3月10日に将来にわたり震災の記憶と教訓を伝え、警鐘を鳴らし続ける「目に見える証」として活用し、市が目指す「津波死ゼロのまちづくり」に寄与することを目的に「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館（以下「震災遺構・伝承館」という。）」をオープンしました。

気仙沼市東日本大震災伝承検討会議

市における震災伝承のあり方に関する検討は、

平成25年11月から平成26年3月まで3回にわたり気仙沼市東日本大震災伝承検討会議を開催し、「伝えるとは何か」「保存とは何か」といった本質的な問題を、震災伝承に関する活動を行っている各委員とともに意見を交わし、市として、震災の記憶と教訓をいかに後世へまた全国・全世界へ伝えていくかの考え方を取りまとめていきました。

【震災伝承の意義について】

- 1 本市震災復興の基本理念（抜粋）
 - ・二度と繰り返さないこの悲劇
 - ・自然に対する畏怖、畏敬の念
- 2 本市震災復興の目標（抜粋）
 - ・津波死ゼロのまちづくり
- 3 震災伝承の意義
 - ・追悼と鎮魂・犠牲を繰り返さない誓い
 - ・災害に強いまちづくり・将来世代への伝承
 - ・沿岸部に暮らす全国・全世界の人々への伝えその後、震災遺構の候補施設を旧気仙沼向洋高校として、主に保存整備の意義を検討する「気仙沼市東日本大震災遺構検討会議」。震災遺構に隣接する資料館機能とともに、防災・減災教育の拠点としての在り方等に関し具体的に検討を行った「気仙沼市岩井崎プロムナードセンター整備検討会議」と多様な観点で検討を重ねていきました。

このような検討を経て、伝承館の展示理念は「将来にわたり東日本大震災の記憶と教訓を伝え、

警鐘を鳴らし続けるとともに、訪れる人に防災・減災の大切さを訴える。一方で、度々津波に襲われ多くの被害を被ってきた歴史事実がありつつ、海からの大いなる恵みを得てきた気仙沼の海との関わりを表現し、自然と共に生きること、そして命の大切さを考えるきっかけを育むものとする。」とまとめられました。

気仙沼市東日本大震災遺構保存活用計画

市は、平成29年9月に気仙沼市東日本大震災遺構保存活用の方針を決定しました。

震災遺構検討会議では南校舎のみの保存としていましたが、平成28年12月の一般公開（全国から135人参加）時のアンケートで、「そのまま保存するのが一番良い」という意見が最も多く、印象に残った場所について「北校舎と実習棟の間の車が折り重なっているところ」が多く寄せられました。この結果を踏まえ、平成29年1月に保存範囲を北校舎等含む校舎全体とする方針を市議会や関係会議で説明し理解を得たことから、南校舎、北校舎、総合実習棟、生徒会館、屋内運動場の5棟を震災遺構として保存し、一部公開し、東日本大震災発災の記憶と教訓を未来へ、そして今後同様の災害の恐れのある全国・全世界の人々へ伝えるための防災・減災教育の拠点として整備することとしました。



震災遺構・伝承館管理運営

管理運営方式は、地方自治法に基づく指定管理制度を導入しています。

開館から5年程度は、「業務分割方式」を採用し、入館料及び研修室等使用料は市の収入とする「収受代行制」としています。

震災遺構・伝承館見学のみどころ

当館は、平成23年3月11日に本市で何が起きたかを映像シアターで映像を13分間視聴し、その後震災遺構である向洋高校旧校舎に入ると光景が一変します。津波によって破壊された校舎が当時のまま残され見渡す限りがれきが散乱しており、3階には津波で流されてきた車や500メートル先にあった松の木、4階の教室には津波の到達地点と言われるレターケースの錆びた部分、そして屋上には生徒約170人が避難した階上中学校までの経路図、すぐ足元まで津波が迫った写真、学校に残った教職員等45人が最終的に避難した場所、西側の外には津波で5台ほどが折り重なった車が映像では感じられない津波の凄まじさを伝え、そして伝承館に戻り講話室で被災者の想いのビデオを3本（10日遅れの階上中学校の卒業式の答辞、津波で奥さんを亡くした男性、夫と子どもをなくした女性）を見ていただくことで、当たり前前の生活がいかに大切かを私たちに教えてくれています。

見学後、来館者自身が「感じたこと 伝えたいこと」を付箋に自由に書くスペースを設けています。ただ「すごい」「怖い」で終わらせるメッセージは一つもなく、自分自身の震災や私生活に対する思いが残され、付箋には「津波の非情さがとても伝わり、この震災は絶対に忘れてはならないと思った」「この震災を世界中の人々に知ってほしい」「3.11を改めて実感できる場所」「自分の悩みがちっぽけなことだなと思った」など震災の教訓や生きていることへの感謝のメッセージが多

く見受けられます。



語り部ガイド

震災遺構・伝承館の語り部ガイドは、伝承ネットワークと連携をしながら、震災遺構・伝承館を案内し語り部自身の体験や教訓を語りかけ、見聞きした人の心に残り、防災意識の向上に繋がるよう努めています。語り部一人当たり20人まで対応

しています。

また、伝承ネットワークでは、地元中高生の語り部の育成に力を入れ現在約80人の生徒が語り部ガイドを行い国際協力機構（JICA）の研修生や修学旅行生など国内外からのお客様に対して、震災の教訓を自分の言葉で分かりやすく丁寧に説明を行っています。



震災遺構・伝承館の来館状況

年間の推定入館者は重回帰分析により1年目75,000人、2年目58,000人としました。当初目標75,000人に達成することは難しいだろうと当初の入り込み数を不安視する声もありましたが、甚大な被害を受け、多くの支援をいただいた本市が震災遺構・伝承館を持つことは義務であり、被災リスクの高い地域の方や将来世代に津波の恐ろしさを伝え、防災教育を提供する場として価値ある施設と認められ、1年目は国内外問わず家族連れや

企業研修等の団体の多くのお客様が来館した結果、87,328人が来館しました。

オープン当初の主な来館者は県外からの観光客で個人や家族連れで来館される方が多く、最寄り駅からの交通アクセスが不便なこともあり、ほとんどが自家用車またはレンタカーを利用して来館しています。団体のお客様も多く教育関連の修学旅行や震災学習、県内外の各企業の各種研修視察、公民館事業等で来館するケースもあります。

令和2年度は、コロナ禍の状況で4月6日から5月31日まで休館、6月以降の団体は移動する際の密を避けるためにバス利用を中止したため、キャンセルが相次ぎました。しかし、9月以降は、修学旅行の行き先を関東、関西方面から東北方面に変更する学校が多く、当館は各学校及び旅行代理店が下見をされ、コロナウイルス感染症予防対策を徹底している施設と評価いただいたおかげか、

震災・防災学習の拠点として修学旅行の行き先に選んでいただけることが多くなり、来館された方々に語り部の話や旧校舎内の破壊された教室を間近でご覧いただくことで、津波の脅威を肌で感じていただいています。

そして令和3年11月には、来館者累計15万人の達成に至りました。

おわりに

震災から間もなく11年を迎えるにあたり震災遺構・伝承館の経緯と意義について紹介させていただきました。震災遺構・伝承館は、東日本大震災の記憶と教訓を伝え、将来にわたり警鐘を鳴らし続ける「目に見える証」となり、防災・減災教育の拠点として社会に貢献していく所存です。ぜひ、みなさんのお越しをお待ちしております。